



EXHIBITION
INFORMATION

第21回 日本陶芸展

■茨城展…2011年7月9日(土)～9月4日(日)
茨城県陶芸美術館

■愛知展…2012年2月18日(土)～3月25日(日)
高浜市やきもの里かわら美術館

小橋順明さんの入選作品が展示されています。

※各会場の都合により一部展示されない作品もあります。

小橋 順明

PROFILE

こばし まさあき
美術家・陶芸家
備前焼作家
香川大学教育学部卒業
香川大学大学院
教育美術陶芸専攻修了



恩師である倉石文雄教授とは今でも連絡を取り合い、
展覧会やプロジェクトに参加しています。



「陶器の形は理屈で出来ている。センスで作るのではない」
という小橋さん。これも倉石教授の教えだそうです。

陶

芸家といえは、作務衣を着て
工房に籠もっているイメージ
があります。ところが、新進気鋭の陶芸
家・小橋順明さんのアトリエを訪ねる

と、「さっきまで土をこねていました」という小橋さんが、Tシャツとジーンズという格好で現れました。今までのイメージと違う、新しい陶芸家の姿。経歴にも意外性があり、なんと香川大学の教育学部を経て大学院まで出ています。「すべては、教育学部で倉石文雄教授と出会ったことがきっかけです」。倉石教授のゼミからは、小橋さんが知っているだけで、ほかに4人の陶芸家が生まれているそうです。

小橋さんは岡山市出身。幼い頃から絵を描くことが好きで、美術教育専修を目指して教育学部に進学しました。当初は、美術の先生も含め、絵を描くことと関係した職業につきたいと考え、いたそうですが、陶芸に出会ってからの間に、か絵の事が頭の中から消えていたそうです。

「絵画は、いつまでも1枚の絵を描き続けることができます。ずっと未完成というところもありえます。ところが、陶芸は完成品から逆算して作っていく。そこに惹かれていきました」。

陶芸家になろうと決めたのは、単位不足で留年をした4年生の時。膨大な時間ができ、やりたいだけ陶芸に打ち込めるようになり、心の中を漠然と漂っていた思いが結晶化しました。

そこから陶芸家になるまでの道のりは、陶器を作る時と同じように逆算しながら歩んでいます。一般的に、陶芸家になるためには窯元での修行が必要。しかし、何も考えずに窯元にいけば、その色に染まってしまう可能性があまりあります。そこで大学院に進み、陶芸家でもある倉石先生の指導を受けながら、陶芸に対する自分の考え方をハッキリ

させました。卒業後は、備前焼の師匠に3年間弟子入り。その後、備前焼の窯元で職人として3年間働き、2009年に備前焼の陶芸家として独立しています。独立3年目にあたる今、小橋さんが目指しているのは、3つのステージでの活躍です。ひとつは、陶芸家として作家性の高い作品を作ること。もうひとつは、プロダクト製品としての備前焼の追求。作家の名前で売るのはなく、マーケティングを元に、製品として陶器をプロデュースして世に送り出します。最後は、アーティストとしての表現。陶器を器に限定せず、より抽象的な世界を表現していきます。3つのステージで、同じ次元のパフォーマンスができることが、これからの陶芸家には必要だと考えているそうです。その上で、「使ってくれる方にイノベーションを生む陶器を作っていく」という小橋さん。新世代の陶芸家の姿が、ここにあります。

イノベーションを生む陶器

